



# 南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

## 今年の教区の目標

すべての命を守るため、  
キリストと共なる  
平和の道を歩みましょう。

〒902-0067 那覇市安里3-7-2

カトリック那覇教区本部

TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人 W.F.バートン司教 1部40円

<http://www.naha.catholic.jp/>

(1) 2020年8月1日 (毎月1日発行)

カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ

第741号 (8月号)

## 平和の元后なる聖マリア 私たちのためにお祈りください

平和旬間  
8月6日～15日

八月、日本では六日に広島原爆の日を、九日に長崎原爆の日を記念し、十五日に終戦記念日を迎えます。日本の教会においては、八月六日から十五日を「平和旬間」として、全国各地の教会で平和に関連する行事が行われます。広島、長崎における原爆犠牲者の追悼式、沖縄での諸宗教者による平和の集い等、平和を求めて毎年様々な取り組みがなされています。

今年には新型コロナウイルスの感染拡大を防止する観点から、例年行われてきた諸々の集いも、規模が縮小されたり、中止が決まったりしているようです。それぞれの置かれた場で、意識して「平和旬間」を祈りのうちに過ごすようにいたしましょう。

ところで、教会はしばしば聖母マリアの取次ぎを願って祈りますが、典礼暦の上では、八月十五日は「聖母の被昇天」の祭りと位置づけられています。

一九五〇年十一月一日、教皇ピオ十二世(在位一九三九～一九五八)は、「無原罪の聖母が地上の生涯の終わりにからだも魂もろとも天にあげられた」と、

処女聖マリアの被昇天の教義を莊厳に公布しました。

もともとは五世紀のエルサレムで、八月十五日に「神の母マリア」が祝われていました。六世紀には、マリアの永眠の日として東方教会で祝われるようになり、これが七世紀に、西方教会でも受け継がれることになったようです。

聖書の中では、聖母の被昇天についての直接的な記述はありませんが、教会は何世紀にもわたって伝達されてきた伝承(聖伝)を聖書とともに大切にしてきました。この聖母の被昇天の教義も神から啓示された伝承の一部分であることをかつての司教たちが一致して認め、ピオ十二世が公に教会の教義であることを公布することによって、マリアが神の母であることを特に強調したと考えられます。

聖母の被昇天への信仰は、マリアだけが特別な存在だと言いつつ、キリストに

よる救いにあずかる人たちの象徴として、信じるすべての人たちの救いへの希望を表現するものです。

第二バチカン公会議は、「キリストの生涯の秘義を、一年の周期をもって祝う際、教会は神の母である聖マリアを特別の愛をもって敬う。…教会は聖母のうちに、あがないの最もすぐれた実りを感じ、ほめたたえ、あたかも最も純粋な姿のうちににおけるものとして、聖母のうちに、自らが完全にそうありたいと欲



聖母被昇天 (ルーベンス)

し、希望しているものを、喜びをもって見つめるのである」(教会憲章一〇三)と言っています。平和への願いと祈りが捧げられるこの時期に、教皇フランシスコが発した次の言葉を今一度、心に深く刻みたいと思います。

「平和を築くには、戦争をする以上に勇気が必要とします。出会うを受け入れ、対立を退けるには勇気が必要です。暴力でなく対話を、敵意ではなく平和を、挑発ではなく協定の尊重を、これらすべてには大きな勇気が必要です」。

私たちが勇気を持って平和の使徒として働くことができるよう、聖母の取次を祈りながら歩んで参りましょう。

## 寄稿

## 「貧しい人」との出会いとかかわりを通して

司祭叙階二十五年を振り返って

横須賀三笠教会 横須賀大津教会主任司祭 浜崎眞実神父

ブラジルの北東部「ノルデスチ」には、美しい砂浜の海岸があります。そこに金持ちの男女が裸で日光浴をしている海岸がありました。その地域のレシフェ・オリンダの大司教にH・カマラという人がいました。

ある記者から「大司教様、あそこ海岸ではたくさんさんの若い男女が裸で過ごしていますよ。何か忠告しなくてはならないのではないですか」との質問があつたそうです。カマラ大司教はそれに対して「私は自ら裸になる人には興味はありません。それよりも着たくても着るものがない人たちのことが心配です」と答えたそうです。二〇〇二年ブラジル訪問の際佐々木治夫神父から聞いた印象深いエピソードです。

## はじめに

一九八三年四月福岡サン・スルピス大神学院に入学した。二年から三年経ち哲学科から神学科に移る頃、学年の近い仲間の

間で疑問が次々に湧いてきた。

「ここは管理者養成所、あるいは社長とか偉い人を養成するところではないのか。聖書に描かれているイエスの生き方とは違うのでは・・・」「規則を守り、教授の言うことに疑問をもたずに生活してそれが自分を生きることになるのか」「箱入り娘ということばがあるけど、俺たちは箱入り息子じゃないのか。社会のこと何も知らない。世間知らずで井の中の蛙ではないのか」などなど。そこで一学年上の先輩たちが中心になって「社会問題研究会」というサークルのようなものを立ち上げた。エイズ問題などさまざまな社会問題を調べて発表する集いであつた。私は「指紋押捺問題」について興味をもち新聞報道や雑誌などを通して調べ発表した。

その頃、崔善愛さんも福岡にいて指紋押捺拒否で裁判をしていたようである。後に二〇一二年に相模原教会で、指紋押捺拒否した者同士の対談を企画して

登壇いただくことになった。

## 学生時代の「釜ヶ崎体験」

一九八〇年台の後半まだ神学生の時、釜ヶ崎を訪ねた。そこで夜回りや炊き出しに参加した。その頃、「あそこに行くときキリストに出会える」との言い方もあつた。そこでは、神学校では体験できないものを得られて、確かにいい学びの時だと思つた。しかし野宿をしているおっちゃんたちは私の学びの材料、教材なのかとの疑問が沸き起こつてきた。何かおかしいとの思いも募つてきた。それから数年出向くことは控えたが、気になる場ではあつた。

## 生活困窮者へお金を渡すこと

司祭となつて五年目、奄美大島から離れたある教会に留守番でいたとき、野宿のおじさんがやつてきた。お金を貸して欲しいとのこと。確か二千元だったかと思う。自分の名前と二千元を借りたこと、いつまでに返すと

いう内容を紙に書いて渡してくれた。お金は返つては来なかった。別な人が教会を訪ねて同じようなことが何度あった。お金を渡すと目の前からいなくなり、ホツとした。

お金は返つてこなかったけど、面倒なことからはとりあえず逃れることができた。違和感が残り、何か変だと思いつつ、自分にできることはお金を渡すことしかないと感じて切つていた。

目の前に現れた人を無視する「勇気」もなく、親切に対応したはずでも、スツキリはせず負い目も感じていた。相手の話を聞いてもそれが本当なのかどうかは分からないし、騙されているのではとの疑念が湧きつつも、騙されても信用するのが宗教者である司祭の務めだとも考えていた。

## 野宿者のための静岡パトロールでの活動

そんな経験があつてから静岡に移動した。そこでは「野宿者のための静岡パトロール（しずパト）」が立ち上がったばかりだった。二〇〇〇年の六月に野宿の仲間たちが沖縄で開催されるサミットに「金持ちが金持ちであり続けるためのサミットには反対だ！」との声を届けるた

めに出向く取り組みがなされていた。

東京から歩いてところどころ野宿者支援の団体がある場に立ち止まって野宿の仲間や支援している人たちと交流する企画であつた。静岡にも立ち寄つて教会を使つて交流をしたいとの申し入れがあつた。私は協力司祭として、主任司祭からこの申し入れをどうするか任された。

そこで、拒否する理由はないと判断して、受け入れて交流をさせた。それからしずパトの活動にも参加するようになった。全国的には、支援団体がアパートを借り上げて、野宿している人をまずはアパートに住まわせて宿所を提供し、そこを居所として生活保護申請のお手伝いをしていった。

しかし、しずパトにはアパートを借り上げのお金もないしメンバーも少ないため、路上から直接申請する取り組みを始めた。それにはもう一つの大きな理由があつた。それは、そもそも家がないくらい困窮している人こそが生活保護を利用できるはずだとの信念からであつた。

しずパトの事務局長は憲法学者なので、最も貧困で生活に困っている人に生存権が保障されない社会の方がおかしいとの確信

があつたのだ。憲法二十五条を根拠に具体的に生活困窮者の健康で文化的な最低限度の生活を保障する生活保護法は、努力して家を確保したり仕事を見つけた人へ「ご褒美」として与えられるものではないはずだからだ。それからいろんな人の生活保護申請の同行をした。

そこでは行政による差別対応を目の当たりにし、排除も受けて悔しい思いや怒りもおぼえた。今から振り返ると、それは社会の仕組みを意識して行動を起こすことであり、立場を選んだ活動であつた。即ち中立の立場で野宿に至る原因を探ったりするのではなく、今現在、野宿を強いられる人の側から自分たちの生きている社会のあり方を見ようとしたのである。

しずパトに参加する前、目の前に現れた生活困窮者は自分の生活を乱す迷惑な存在と見なし、お金を渡して目の前から居なくなつて安心した。また、その人の話はどこまで信用できるのかと、できるだけ中立で客観的な立場で聞くとしていた。しずパトに参加してから、野宿している人への向き合い方が変わった。迷惑な存在と見るのではなく、救済の対象にするのでも無く、野宿を続けざるを得なくする社

会の仕組みを変えるために共に歩む存在と受け止めるようになった。中立は傍観であり、傍観は加害に加担することに気づかせられ、客観性とか中立という幻想からも解放された。その流れで、市による駅の地下道や公園からの排除に対して一緒に抵抗し申し入れなどにも取り組んだ。

また「自分たちの命は自分たちで守る」との趣旨で、野宿をしている人たちの集いの「なかまの会」を立ち上げるのを促した。その後、紙すき作業をしたり、清掃作業をしたり「なかまの会」がさまざまな取り組みをするのを側面からサポートもした。また野宿から生活保護を使つてアパートで生活するようになった人たちの集いとして「かたつむりの会」も立ち上がった。そこではアパートに入つて孤立しないように、一緒に食事会を開いたりお楽しみ会を企画したりで懇親を図つた。

### 支援という名で健康で文化的な生活以下を強いる危険と現実

そんな取り組みに参加しているなか、あるとき、野宿の仲間がこつそり教会の離れの建物の屋根裏で寝泊まりすることがあつた。そのことを教会の信徒が見つけて、クレームをつけて

きた。その際、私は普段誰も使っていないところなのだから、野宿者が体調を悪くして困っているのだから、寝るのに目くじらを立てるのは心が狭いと思つた。後日、そのことで主任司祭と議論になった。主任司祭は「野良猫や野良犬ではあるまいし、そんなところで寝るのは人間ではない。それを認めるのは、人間以下の生活を応援することに」と主張した。

そして、寝ていたらそこから出ていくように説得しなさいと言われた。初めはこの主任司祭は現場のことがわかっていない。信徒の心の狭さが問題なのに、・・・と納得できなかった。しかし、議論によつて私の考えが間違つていたことに気づいた。

しずパトで活動しながら、私は出来るだけ話を聞くこと、そして福祉事務所に付き添うことを課題として、お金を渡したりすることはしなくなった。お金を借りて来た人に、お金は貸せないけどお話は聞く。場合によっては福祉事務所にも同行しますよ、と伝えると「それでも牧師か！」と怒鳴つて帰る人もいた。その頃、釜ヶ崎で活動していた本田哲郎さんが「強いられる野宿を支援するのではなく、野宿を強いられる人の本当の

願いに連帯したい」と語つていたので知つた。かつて、目の前に現れる生活困窮者にお金を渡して去らせる行為は、まさに強いられた野宿を支援することではなかったのだ。いくら優しく親切に対応したとしても、健康で文化的な生活以下に追い込んでいたことに気づいた。

支援者としての立場で救済しているつもりが実はそれが当然の権利である生存権を保障することにはならず、加害行為であつた。対等で平等な関係を築こうとはしていなかったのである。

### 平等についての感覚

障害字の世界では私たちの社会を「配慮の不平等な社会」と指摘する。はじめてその表現を耳にしたとき、衝撃を受けた。

そもそも私たちが生きている社会はいわゆる「健常者」への配慮に満ちていて、不平等だとの認識からの主張だ。車椅子で移動する人にとっては、階段は障害物でしかない。階段という障害物を避けてスロープかエレベーターを利用して不利な状況を脱け出し、自らの望みを達成できるのである。即ち階段は健常者に「配慮」されたもので、車椅子の人にとっては配慮され

かない。そしてそのことに健常者の多くは気づいていない。

世間には「配慮を必要としないうちの多くの人々と、特別な配慮を必要とする少数の人がいる」との強い固定観念がある。しかし、「既に配慮されている人々と、未だ配慮されていない人がいる」というのが本当の現実で、正しい見方だ。

多数者への配慮は当然のこととされ、配慮とは見なされない。対照的に、少数者への配慮は特別なことで可視化される。だから世の中には「配慮を必要としない人」と「特別な配慮が必要な人」がいるのではなく、「既に配慮されている人々」と「未だ配慮されていない人」がいるのだ。「既に配慮されている人々」と未だ配慮されていない人がいるとの視点を獲得したときに、平等についてのセンスは一気によくなる」とも言われる。

障がい者は特別な配慮を求めているのではなく、配慮を平等にすることを求めているのだ。

(以下次号に続く)



## 2020年7月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時: 2020年7月7日(火) 10: 00~12: 00 開催場所: 教区センター

### 1.報告及び連絡事項

- ・司会はデニス神父。前回(6月会議)の議事録確認一新田。
- ・ウェイン司教より日本司教団による6・23平和メッセージ発表について報告が行われた。日本の司教団が広島、長崎に加え、沖縄に目を向けての平和発信が行われたのは初めてのことであり、メッセージの作成段階から沖縄からの要望を提案し、関わり続けた結果として司教団メッセージが沖縄戦へも言及されたことは大いに評価できるとの報告があった。審議事項で各小教区からの報告も受けたい意向が述べられた。
- ・8月1日(土)に安里教会を会場に行われるカトリック学園の研修会について、津波古事務局長から、特に小教区に幼稚園や学校を有する教会の主任司祭たちに、研修会への参加の呼びかけが行われた。
- ・8月6日(木)から15日(土)にかけて行われるカトリック平和旬間について、ウェイン司教より報告が行われた。広島原爆の日、長崎原爆の日、終戦記念日を挟んだ平和旬間の間、広島や長崎と心を合わせて、戦争や原爆の悲惨さを伝えるDVDを鑑賞することや、共にロザリオの祈りを唱えること、また、ミサの中で原爆犠牲者追悼ミサの共同祈願や平和に関する共同祈願を参考にして祈る等、各小教区で工夫して平和のために祈るよう要請が行われた。
- ・カトリック中央協議会からのお知らせを受け、津波古事務局長より説明が行われた。コロナ禍の影響で公開ミサが見合わされていたことから、特別献金日が移動される。例年聖金曜日に行われている聖地への献金は、十字架称賛の祝日に近い9月13日(日)に、聖ペトロ使徒座への献金は10月4日(日)に、世界広報の日の献金日は11月15日(日)に移動されることが報告された。
- ・ウェイン司教より、司教会議でもズーム等を活用したりリモート会議を取入れたりしているので、マイケル神父がリモートを活用して会議に参加しているように、コロナ禍の中では、様々な工夫をして教会活動にも活かしていくよう要望があった。

### 2.審議事項

- ・サマーキャンプについて、担当のヨアキム神父より説明が行われた。既に「南の光明」で日程を発表してしまったが、その後に水泳時の潮の干満を考慮し、時間の変更をしたことが報告された。コロナ禍の影響で、いつものキャンプではなくBBQや海遊び等レクレーションが主体の日帰りのデイキャンプとなる。8月8日(土)は小学生を対象に、8月10日(月)は中高生を対象に行われるが、保護者の参加も可能とし、対象年齢に満たない子どもたちの参加も保護者同伴で認められる。ただし、正式な参加対象者以外の方の飲食物等は各自で持参し、すべての安全面についても保護者が責任を負うことを条件とすることが強調された。また、宮古、石垣からの参加は宿泊を伴うものになってしまうため、今回は見合わせていただくよう教区から説明の文書を出すことが確認された。可能であれば、宮古と石垣については小教区独自の取組みを模索して欲しいとの要望も出され、もし開催するならば、その経費助成として教区から3万円を支給することとした。
- ・宮古の旧ITセンターの活用についてウェイン司教から報告があった。司教訪問で宮古を訪れた際にONDのシスターたちと話し合いを持ち、現状ではシスターたちには広すぎて管理活用が困難であり、また安全管理に不安があることなどから、必要な改修は教区が責任を持って行った上で修道院は保良の教会に移っていただくこと。また、旧ITセンターの司祭館とチャペルはそのまま教区で活用するが、修道院部分については沖縄ダルク等の弱い立場に置かれた人に奉仕する団体に無償で一定期間を区切って貸与し、より良い活用を模索したい旨提案され、了承された。
- ・マーシーさんから司教訪問の日程の調整確認が行われた。7/19名護、8/9与那原、8/16首里、9/20安里、9/27読谷の各小教区で司教訪問が行われる。尚、8/30日は主日のミサの補助としてウェイン司教が読谷教会で司式される。
- ・信徒評議会の開催について。8月29日(土)午後2時から5時の予定で開催する旨司教から報告があった。宮古、石垣からは、リモートによる参加も検討したい。尚、小教区からは代表者1名とカテキスタ養成プログラムに参加を希望する者1名の参加をお願いしたい旨要請があった。
- ・浦添に所在する、教区の使用できない所有地(傾斜・原野地)について、津波古事務局長より説明が行われた。購入を希望する業者から申し入れがあり、今後も教区として単独では利用不能なため、売却したい意向であることが説明され了承された。
- ・前回の会議で名護教会の敷地内の樹木の伐採について話し合われたが、各主任司祭は教会式地の管理者でもあるので、信徒たちと話し合って、所有地の管理についても目配りしていただきたい旨要請された。
- ・慰霊の日に各小教区で行われたミサについてそれぞれの主任司祭から報告が行われ、分ち合われた。
- ・感染防止対策に対する感謝の意がウェイン司教より伝えられ、首都圏での感染拡大により流行の第二波も懸念されて

(5頁へ続く)

私は、与那原教会に所属しています。教会に通い始めてからもいろいろと難しい時期があり、生きずらさを感じていました。

ある日与那原教会の女性の会の招きで、フォコラーレのメンバーが、どうやって御言葉を生活の中で実践しているのかを話しに来てくれました。その分かち合いを聞き、感動したのを覚えています。すばらしい精神だとは思いましたが、私にはほど遠く、近づけないと感じて、それ以後は集まりに参加することはありませんでした。

ところが、

何年か後に、他のフォコラーレのメンバーの誘いで、一泊二日

## たて軸よこ軸 共に前進する

与那原教会

新城留美子

のマリアポリ(愛を生きながら過ごすフォコラーレの大きな集い)に参加することになりました。改めて、フォコラーレの精神を生きている方達の分かち合いを聞いて、罪深い私だけどやっぱりフォコラーレの精神を生きたいと思いました。

それから、できる限り集まりに参加しています。失敗してはやり直しばかりですが、その度に神様の愛を感じる恵みを頂いています。その集いの中の一つですが、毎月開南教会で「いのちの言葉」(聖書の言葉を黙想し、生活の中で実践するための助けとして書かれたもの)の集いをやっています。フォコラーレ本部か

ら送られてくる映像を使って黙想したり、いのちの言葉のプリントを読んで、その内容について分かち合ったり経験を聞いたりします。

ある日の集まりの時でした。そこで準備されたプリントをお持ちでない方に、わたしは率先して配っていました。集いが始まった直後に最後の方がいらして、私ともうひとりのメンバーの間に座りました。もうプリントはないな——、私をお渡しすると、後で分かち合いの時必要かもしれないし、どうしようかと躊躇していました。

その時、反対側に座っているメンバーの方が、迷いもなく当たり

前のように、サツと自分のプリントを渡しました。それをみて私は、自分の物を渡すことを躊躇していた自分が恥ずかしく思うと同時に反省しました。プリントが余分にあるときは、せつせと配っていました。自分の物を失うことを恐れている弱い私は、自分の物を分け与えることができませんでした。この日、結局私は、そのプリントを使うことはありませんでした。

集いが終わったその時、私は神様に信頼していい自分を見ることができました。私は、キアラ(フォコラーレの創立者)が、「与えなさい、そうすれば与えられる」という聖書の言葉を生きた経験をたくさん

聞きました。彼女には、いつも惜しみなく与えることによって、必要なものは神様が備えてくださっていました。聖書の言葉を実践できない自分が残念でした。

「いのちの言葉7月号」に、「実際、神を愛し、兄弟を愛するという神の御心を誰でも実行できます。イエスは、私たちが愛するなら、その人はご自分の家族、兄弟姉妹だといってくださいます。私たちは、自分の過去や恐れ、狭い自分の枠から解放される幸運を手にすることができのです。自分の限界や弱ささえも、自己実現に向かって跳躍するために役立つ『踏み台』となり、すべてに意味を見いだすことができるでしょう」とあります。

この文章を読んだ時、人間的に弱い、失敗ばかりの自分ですが、希望を感じて嬉しくなりました。簡単には御言葉を生ききれない弱い私ですが、そんな自分を認め、それゆえに神様に変えていただくように祈ります。そして自分の我に打ち勝って、聖霊の導きに従うものとなるように前進していきたいと思えます。年齢も性別も違う人達の信仰の体験をききながら、お互いが豊かになる経験が出来るいのちの言葉の集いが毎月楽しみです。

互いに裁かず助け合い、愛し合う家族のような関係が、教会の中や社会の中にも広がりますようにと、弱い私ですが少しでも貢献できるように努力していきたいと思えます。

いることから、「感染防止ガイドライン」を掲示板に貼り出しと、今後も引き続きマスクの着用等のガイドラインの遵守徹底が依頼された。

- ・コロナ禍に伴う感染防止対策等により、これまでにない様々なストレス・心労が加わった状況で、今年は休暇を取ることも難しいため、「司祭・助祭特別集会」を開催することが提案された。名護教会を中心会場に、近隣のホテルに宿泊し、ゆったりした時間の中でのミサ、分かち合い、管区司祭集会の事前学習等のプログラムや、この集会が今後の宣教司牧活動に資する目的などが提示され、了承された。期間は8月17日(月)～20日(木)とし、詳細については事務局と担当者バイ神父で調べ、早めに通知することとした。
- ・8月の会議は例年休みとなるので、次回拡大司祭助祭会議は9月15日(火) 午前10時～12時、教区センターで開催する。9月会議は例年黙想の家で開催してきたが、上記の「司祭・助祭特別集会」で黙想の家を利用するため、今年は教区事務局で行うこととなった。

2020年7月16日

記録：新田 選

承認：ウェイン・フランシス・バートン司教

## “What is the COVID-19 telling us”

COVID-19 has come and changed everything, not only to our health and economic as well, but also to our society's basic structures of social cohesion and even our freedom. Even though in the Church, Churches broadcasting services online from empty sanctuaries is the new reality, for now at least, in a world of stay-at-home orders where large gatherings of people are forbidden out of fear that it could cause a local outbreak of COVID-19.

But in this Article, I would like to share about “What is the Coronavirus telling us”. Is it telling us that we don't have enough beds in hospitals, is it telling us to keep our nations shut down? Or is it telling us to wash hands, to wear masks and to keep a social distance always? So, what is the Coronavirus telling us:

1. **It's telling us to keep praying!** Just as we are urged to take care of our physical health amid this crisis, so also we are urged to take good care of our spiritual health. Most of us pray every day. A quick mealtime prayer or a few moments in the morning or before we go to bed are pretty common practices. But praying, and I mean really praying, is a rare effort. What might happen to our families, our churches, and our world if we seized this opportunity of relative stillness and used it for concentrated, long periods of prayer? It's pitiful to waste this unique opportunity. If I don't learn to pray during a worldwide crisis, when will I learn? Our prayer doesn't have to be elaborate or lengthy. But these days we should make a point of setting aside additional time for prayer. For whom and for what should we pray? Naturally, we will want to pray for our families and loved ones and for all whose lives are being disrupted by this crisis. Prayer lifts us up and helps us to see our problems, including a crisis, not merely from our own limited perspective and interests, but indeed through the lens of God's wisdom and love.
2. **It's telling us to continue doing good and sharing with others!** In other words, the only way to free people from hunger is not to act selfishly by keeping the goods we have for ourselves. If there is no generous acts of persons who offer the fruit of their works for the needy, if there is no good will to share with those who don't have, our world will hardly change its face. We can have a new world only when people no longer base their relationship on selfishness and self-interests. In this time of crisis let us be generous to give and to share our things with others, especially to the poor and the needy now. Let us always remember that what we offer to the Lord is never wasted but is gathered in God's plan. Perhaps, it is not used today, but it may be used tomorrow. Giving your small things with humble and sincere heart it will make God smile and the people happy. More than that, the moment you give and share everything you have now on earth that is also a moment you collect, contribute and build your treasury and your bank account in heaven with God.
3. **God is calling us to repent!** True repentance means feeling remorse for the sins we have committed against God and other people; for our actions that caused others troubles and pains, and most of all, offended and hurt God. In other words, we should feel sorrowful of our sins. To repent is important because it is the first step to obtain perfect conversion. If only the world would repent and attain perfect conversion, we might just wake up one beautiful day, in which positive cases of COVID-19 attain recoveries, and others are miraculously immune from it. Saint John the Baptist, the voice crying in the wilderness said, “Repent, for the kingdom of heaven is at hand!” (Matt.2:3). Many Catholics struggle to repent and convert. It would be easier to do if we have in mind the Kingdom of Heaven. If we repent because we want to be spared from this virus, our ultimate reason for doing so should be the Heavenly Jerusalem, to be among the saints, one day after the Second Coming of Jesus Christ and at the end of the world. But if that is not enough for you to repent, then nothing else can convince you.

Finally, Coronavirus is telling us that God alone, No one is guaranteed tomorrow! We still live our life like we will always have a future on this earth. We think about next week, next month, and next year like they are guaranteed dates on our calendars. This is the day the Lord has made; We will rejoice and be glad in it (Psalm 118:24). Do not worry about tomorrow for sufficient is the day for its trouble (Matt.6:34). Do not say “tomorrow we will do this...” (James 4:13). God is trying to teach me something now that will one day be an irrefutable fact.

Holy Mother of God, in our needs, despise not our petitions but deliver us always from all dangers. Amen.

**Fr. Joseph Bui – Awase Catholic Church**

# 教区NEWS教会

## 女性の会総会終える

六月十四日(日)午後二時、安里教会において、各小教区の代議員、役員、担当司祭を合わせ、約二十名で総会を無事に終えることができた。新型コロナウイルスの感染拡大に配慮し、参加人数を制限して座席に配慮した。例年のような、会員の皆様に集まっていただき、顔と顔を会わせて話し合い、楽しい懇親会もできずに、少しさびしい思いの総会になったのは、しかたないが残念だった。

当日を迎えるまでの行程もなかなか大変だった。総会資料作成に必要な代議員の討議が行われる四月、五月の代議員会の中止を決め、それに代わる対策を練るための役員会も三蜜を避け工夫した。思い返せばイレギュラーな対応ばかりだったが、代議員、役員の頑張りで立派な総会資料が仕上がった。総会で承認を得て今年の活動もスタート出来た。

小教区に女性の会は欠かせない存在です。いつも関心を持ち

応援してくださる司祭信徒の皆様、に感謝しています。本年度もよろしく願います。

(女性の会 会長 伊佐悦子)

## フィリピン宣教会

### 感謝ミサ

首里教会

去る七月二十六日、当首里教会及び読谷教会、具志川教会では、フィリピン宣教会司祭たちによる、感謝のミサが捧げられました。これは修道会が本部を置くフィリピン宣教会本部の意向に合わせて、フィリピン宣教会が働く世界各地の教会で毎年同時期に行われている取組みです。フィリピン宣教会は、一九六五年、フィリピンにカトリックが宣教されて四〇〇周年を迎えたことを機に、フィリピンの司教協議会によって設立されました。

フィリピンでは四〇〇年の間に沢山の信徒が生まれ、アジア随一のカトリック国となっていました。司教様たちは、四〇〇年の間に頂いた信仰の恵みに感謝し、まだ信仰の種が蒔かれていない地域に神の国の福音を告げ知らせるために、宣教修道会

を創設しました。

こうして沖縄においても、三つの教会でフィリピン宣教会の司祭たちが働くこととなり、七月二十六日に世界各地で働くフィリピン宣教会の司祭たちと共に感謝のミサが捧げられました。宣教師たちには、司祭養成の段階から宣教司牧に従事する場においても、たくさんの援助を必要としています。彼らの活動は沢山の信徒たちに支えられています。

そのため、毎年感謝のミサを捧げて、沢山の恩人、友人である方々のために祈っています。そうして定期的なサポートや不定期での寄付を募って活動への理解を呼びかけています。日本の教会もいつか宣教師を送り出せるような大きな共同体となることを夢見て過ごした一日でした。

(結・ダドボ)

## 司教公式訪問

名護教会

例年「うみの星の聖母」に捧げられた名護教会では、五月に司教様の公式訪問の日程を組んでいたでいます。ところが今年は、新

型コロナウイルスの感染拡大により、公開ミサが中止となった影響で、司教訪問も日程が大幅にずれ、七月十九日に司教様をお迎えすることになりました。コロナ禍の影響で、司教訪問の様相もこれまでとは違うものになってきたように思います。

それでも、司教様と主任司祭の共同司式でミサが行われ、主の御体を共に分かち合う共同体には大きなお恵みのひとときであったと思います。ミサの後は司教様から教区として

考えていることが提言され、また、名護教会として感じ考えていることへも丁寧に説明いただきました。話し合いの後は、懸案となっている伐採予定の樹木も視察され、予定時間を超えての滞在に感謝の一日でした。

(渡慶次純栄)



## 第53回那覇教区サマーキャンプ 再変更のお知らせ

先月号でお知らせしましたサマーキャンプ改めサマーピクニックに関して、新型コロナウイルス流行の第2波への懸念から、ウェイン司教様や教区女性の会、青年会等関係機関とも討議して、今年度計画してきたサマーピクニックについても中止することを決定いたしました。予め、状況に応じて中止となる場合もありますとのこと案内をしていましたが、申込書の提出期限後の決定となりましたことを深くお詫び申し上げます。教区としての大きな集いはできなくなりましたが、日曜学校等の機会を通じて、各小教区で子どもたちのために、夏休みを利用した取組みを考えていただければと思います。

ヨアキム神父

## 新潟教区 成井 大介 被選司教叙階式

■ 日 時：2020年9月22日(火) 10:00～

■ 場 所：カトリック新潟教会

- ・感染症対策のため、聖堂内は60名程度で執り行われます。
- ・叙階式の模様は当日インターネットで中継されます。



### 洗礼・堅信 おめでとうございます

安里教会

(五月三十一日)

ルルドのマリア

マリア

マキシミリアノ・コルベ

ヒルデガルト

ミカエル

クララ

(六月十四日)

パウロ

開南教会

(六月二十八日)

マルティン

金城鈴乃磨

兼城 辰彦

新里 聖菜

新里 朝秀

戸澤 好美

安田 勇作

下地利恵子

川上 広子

### NPO 法人ぶどう園の会

### 訪問看護ステーション クララ



TEL&FAX:098-937-5001

住所 沖縄市泡瀬2丁目37-15

- ・基本受付 月曜日～金曜日(申込、相談など)
- ・営業時間 8:30～17:30
- ・営業日 24時間365日(緊急対応含む)



### 葬祭の 「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3

TEL&FAX:098-885-8205

<http://w1.nirai.ne.jp/yasurai>

E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間  
受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～  
そうてんしゃ

## 葬 典 社

- \*創業30数余年・・・。
- \*皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
- \*ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

ひ が たかしげ  
(実務担当) 比嘉 高茂

24時間  
受付

てんごく  
☎098-853-1059

